国分寺高校生物部

伊豆諸島などの島しょ部に生息し、準絶滅危惧種に指定されているカラスバトの研究に都立国分寺高校の生物部が取り組んでいる。この鳥は警戒心が強く、深い森にすんでいることから「幻のクロバト」などとも呼ばれている。生物部は伊豆大島で十年以上にわたって調査を続けており、鳴き声の種類や好みの環境を分析している。

「幻のクロバト」を追う

伊豆大島で現地調査

伊豆大島でカラスバトの調査研究を続けている都立国分寺高校生物部の部員たち。中央の市石博先生（後列右端）＝国分寺市で

ハトといえば「ポッポー」とか「クゥクー」という鳴き声をイメージするが、カラスバトは違うようだ。

「主に三種類の鳴き声がある」と二年久保光次郎さんが説明してくれた。通常は「ウ、ウー」と鳴く。だが、仲間内での争い事などでは「ガ、ガ、ガ」と警戒を示す声になる。さらには「ベエロン」とも。「『ベエロン』を聞くのはまれ。相手に何らかの親和性を示すときの声ではないかと推測している」という。

国分寺高校生物部は現在、五十三人が活動中。部の中にカラスバトを研究する班があり、班はさらに「野外観察」「音声分析」「水場撮影」「ドローン」「衛星利用測位システム（GPS）」「偽果テスト」の六つのグループに分かれている。久保さんは音声分析グループに所属。「偽果テスト」は鳥が食べても問題ない材料で偽の果実を作り、カラスバトをはじめとしてどんな動物が食べるのか調べるチームだ。

生物部は二〇一〇年からカラスバト研究を始めた。かつて伊豆大島の高校に勤務していた顧問の市石博先生（六五）が、大島のカラスバトのことを紹介したのがきっかけだった。

鳴き声が聞こえても目撃するのは難しい鳥とあって、最初は島内に落ちていた羽根を集め、羽根の構成成分を分析することで何を食べているのか調べようとした。市石先生は「サンプル数が少なく、結果に結びつかなかった」と振り返る。

大島町の大島公園でカラスバトの生態を調べる生物部員＝今年4月23日、国分寺高校生物部提供

その後はカラスバトの鳴き声を島内のいくつかの地点でスピーカーで流し、野生の個体が反応して鳴くかどうかを調べるなどした。その結果、数が多いのはシイなどの照葉樹が多い谷状の森林地域と分かった。

カラスバトの数が少なくなっているのは、一回に卵を一つしか産まないことや他の動物による捕食、かつては人も食べるために捕獲していたことなどが影響したかもしれない。二年勝見美海さんは「カラスバトが好んですむ森が減り、そのような環境の保全が進んでいないことが大きいのではないかと部内では話している」という。

カラスバト研究は今年で十三年目に入った。この二年間はコロナ禍で現地調査が進まなかったが、今年春から大島での調査を再開。保護した鳥にGPS装置を付けて野生に戻し、行動を追う研究を国立環境研究所や大島公園と共同で始めた。

部員には研究とは別の課題もある。カラスバトを多くの人に知ってもらうことだ。目下キャラクターを考案中で「カラスバトを知らない友人もいる。秋の文化祭にはお披露目したい」と意気込んでいる。

卒業生が作ったカラスバト保護を訴えるポスター＝国分寺高校生物部提供

カラスバト　全身がつやのある黒い羽毛に覆われたハト科の鳥。国の天然記念物。公園や神社で見かけるカワラバト（ドバト）の仲間だが、全長は約40㌢と大きめで、頭が小さいのが特徴。かつては本州にもいたが、個体数が減少し、現在は伊豆諸島や小笠原諸島、南西諸島などに生息している。小笠原諸島のアカガシラカラスバトは亜種。

TOKYO発

文・桜井章夫／写真・平野皓士朗／紙面構成・志沢あれん